
冒険のあと

鈴木祥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険のあと

【Nコード】

N5231N

【作者名】

鈴木祥

【あらすじ】

異世界トリップしたアヤメ。

仲間たちと出会い、混乱した世界を平和へ導いた。

そして、冒険を通して王子である剣士と恋におちる。

全てを終え、愛する人の胸の中で初めての朝を迎えた。

冒険を通して、成長したアヤメの新しい旅立ちへの決断の物語。

天蓋付きのベッド

白い部屋に差し込む朝日がまぶしくて、目を覚ました。目を開けると、ベッドの天蓋が目に入った。

天蓋の支柱に施された彫刻は、とても緻密で。

・・・さすが、王子様のベッドだな。

アヤメは、心から感心した。

そして、その彫刻を見て思い出したのは、アヤメの自分の世界の自分の部屋の欄間だった。

代々、続く華道の家元の家系。その跡継ぎ娘がアヤメだった。

他人の出入りの多い、家。大事な跡取り娘の部屋は、両親の趣味もあり、鍵のかかる、女の子らしい洋間へとリフォームされていた。

けれど、2間続きをひとつの部屋にリフォームした際、間の欄間だけは、取り除かなかった。そのあまりにも見事な細工ゆえに。

アヤメは幼いころ、その欄間が嫌いだった。自分の部屋にそぐわないように思った。

思春期になるにつれ、

その欄間は、逃げたくても逃げられない己の宿命を表しているようで、

できるだけ、目をそらして、見ないようにしていた。

だが、こうして、異世界へ迷いこみ、

この世界での混乱に巻き込まれ、

世界を安寧に導くという冒険を終え、

その困難な冒険と一緒に過ごすうちに

愛情を育てていった男と、

こうして、初めて、生まれたままの姿で

抱き合い、目を覚ましてみると、

あの欄間が懐かしく思い出されるのだった。

倒す前、倒した後

「殿下には、言わずにちょっと来てください。」

三日前、そうワームスに言われて、アヤメは違和感を覚えた。

ほんの少し前、魔王を倒す前の旅の途中であれば、ワームスは、

「アヤメ！トルーには、内緒で、ちょっと来い！」
そう行つた筈だ。

王子であるトルーと

将来、王子の右腕として宰相になるであろうワームス。
ふたりは、幼馴染の親友でもある。

トルーとワームスの国、

トラスタ王国の古い言い伝えにある聖なる泉に
アヤメが現れたことから、

アヤメたちの魔王を倒す旅が始まったのだ。

旅の間、トルーは王子ではなく剣士だった。

ワームスは将来の宰相ではなく、賢者だった。

けれども、冒険が終わり、再びトラスタ王国へ戻ってきた時、
平和を取り戻してきた若者は、

ただのトルーとワームスではいられなくなった。

国民は、もうトルーとワームスを王子と侯爵家の長男とも見ていない。
新しい国の指導者とみなしている。

そうして、ワームスは、
トルーを殿下としか呼ばなくなった。

変化はそれだけではなかった。

魔王を倒すために集まった6人。
帰り道、出会った順番とは逆に仲間たちは別れ、
それぞれの場所に帰っていった。

最初に別れたのは、森の民の長のユイヤー。
彼は、その俊敏さと薬等の知識で、
仲間たちを助けた。

出会った森の出口で、
ユイヤーと仲間たちはにこやかに笑い、手を振った。

そして、森の中にユイヤーが消えて行ったあと、
ソバルナが
「ユイヤーと会うことは、もうないだろうな。」
とつぶやいた。

後で、テラが説明してくれたが、
森の民は、普段、人前には姿を見せることはない。
森の民の集落を、森の民以外が知ることはない。

そういう人々なのだ。

その次の別れは、ソバルナだった。
砂漠の入り口につくと、

アヤメの世界でいうラクダに似た生き物ラクルアに乗った砂漠の民が、アヤメ達を迎えてくれた。

ソバルナは砂漠の民の族長だった。

砂漠の民は国を持たない。

一生を旅をして暮らす民だ。

砂漠の民は、豊かなオアシスに一行を招くと歓迎の宴を開いてくれた。

その宴のあと、砂漠の満天の星空の下、

一晩中、ソバルナとテラは、寄り添っていたのを、アヤメたちは知っている。

そう、トルーとアヤメが冒険を通して、愛を育てたように、ソバルナとテラの間でも、愛が育っていたのだ。

しかし、翌朝、ふたりは笑って別れた。

国を持たない砂漠の民にとって、族長は、その結束力の源である。

そして、このスラルシ地方の豊かさの一旦をになっているのは、砂漠の民の移動なのだ。

砂漠の民は、隊商の民である。

いろいろな品物とともに、知識や技術も、その旅によって、スラルシ地方の国々へと広がる。

魔王の破壊によって、疲弊したスラルシ地方の復興には

砂漠の民の活動が重要になってくる。

まずは、ちりぢりになった砂漠の民を
族長であるソバルナの力で束ねることが大切だ。

そして、アラスルラの王女であるテラは、
魔王によって、王である父を失っている。
元は、宝石のようと言われたアラスルラの王都も
破壊尽くされた。

ソバルナと別れ、
4人になった一行が、アラスルラに入った時、
魔王を倒して帰国したテラを
国民は女王として歓声をあげて迎えた。

冒険の間、
ただの冒険者であった
マイヤーもソバルナもテラも、
冒険が終わり、それぞれの国で、それぞれの役割に
帰っていった。

そして、トラスタ王国に帰ってきた
トルーとワイヤーも
それぞれの役割を果たそうとしている。

本当に為すべきことは（前編）

ワームスは、悩んでいた。

この事実を告げるべきかどうか。

帰国してすぐに、城の老学者から

聖なる泉の門が再び開いたと聞いた。

聖なる泉の門は、アヤメがこの世界へ現れた場所である。

これで、アヤメが元の世界へ帰れる可能性がでてきた。

けれども、聖なる泉の門が、

アヤメの元いた世界に通じているという保証はない。

また、別の世界へと通じている可能性もある。

そして、同じ世界へ通じていたとしても

アヤメの生きていたその時代に帰れるとは限らない。

この世界と向こうの世界の時間が

同じように流れていないかもしれないからだ。

もしかしたら、このわずか1年あまりの旅の間に、

向こうの世界では、100年以上の時が経ち、

アヤメの知っている人間は、もう誰も

いなくなってしまうているかもしれない。

その上、もしもアヤメの生きていた世界の

アヤメの生きていた時代につながっていたとしても、

アヤメの元いた国へつながっているとは限らない。

戦火の広がる国へつながっていて、

アヤメが元の世界へ帰ったとしても、
アヤメの国へ帰れる前に命を落とすこともある。

まだまだ、問題はある。

アヤメの世界のアヤメの時代のアヤメの国につながっていたとして、
再び、無事に異世界の壁を超えることができるのか？

もしかしたら、異世界の壁を超えることで
命を落とすこともありうる。

そこまでの危険を犯して、

アヤメを元の世界へ戻すことが必要なのか？

アヤメは、この国を、いやこの国だけでなく、
この世界を救ってくれた。

自分たちは、自分やトルーや仲間たちは、
自分の大事な人達や大事な国を守るために
戦った。

けれども、アヤメは異世界の人間で、
この冒険には、何の関係もなかったのだ。

それなのに、アヤメはその身を犠牲にして戦ってくれたのだ。

そんなアヤメに危険な賭けをさせて良いのか。

その上、トルーとアヤメは愛し合っている。

勝利の女神であるアヤメをトルーが妻として娶ったとして
国民の中で、今現在、異を唱える者は1人としていないだろう。

冒険の中で、ワームスは、

トルーとアヤメが愛を育むのを一番間近でみてきた。

1年間あまりの短い時間とはいえ、

何度も死の瀬戸際に立たされるといふ濃密な時間の中で、
全幅の信頼を置くことのできた仲間であるアヤメ。

幼馴染である親友のトルーにふさわしい
恋人であり、妻であると、ワイヤーは思う。

しかし、である。

それは、トルーがただのトルーであり、
ワームスがただのワームスである時の思いである。

トルーが将来の王であり、

ワームスがこの国の一端を将来担うのであれば。

『アヤメには、最早、利用価値がない。』

それが、冷静なワームスの出した結論である。

本当に為すべきことは（後編）

魔王の脅威が去った今、

次に起こるであろう事は、争乱。

この豊かなスラルシ地方が、

ここ数年、この世界の共通の敵が魔王だったからだ。

魔王が倒れた今、魔王によって疲弊した国は、

国力を戻す安易な手段として、このスラルシ地方を
狙うだろう。

特に、隣国アラスルラの賢王、テラの父王が亡くなった今、
アラスルラを狙って、各国は動き出すだろう。

アラスルラとトラスタ国は友好国である。

文化と商業のアラスルラと

農業と産業のトレスタ王国。

車の両輪のように、スラルシ地方の豊かさを担ってきた。

お互いになくってはならない、国なのだ。

実際、魔王が降臨する前、トルーとテラに婚約の話が内々にあった。
両国の統合のため。

民族も言葉も、習慣も近い両国は、
統合してもあまり問題はない。

他国からの侵略から自国を守るため、両国の統一というのは

もう何代も前から、話題にのぼっていることであつた。

そう、トラスタ王国・アラスルラ、そしてスラルシ地方にとって長い目で見れば、この時期に、両国の王と女王が婚姻を結び、生まれた子どもによって、両国を統一することが、一番良いことなのだ。

だが、そのためには、アヤメは邪魔なのである。

アヤメを差し置いて、トルーとテラが婚姻を結ぶことは難しい。

異世界から来たアヤメには、居場所がない。

冒険が終わり、救世主となったアヤメは、

この世界では、トラスタ王国に居るしかないのだ。

そして、救世主であるアヤメはトラスタ王国で

大事にされなければならない。

その側で、トルーとテラが婚姻を結ぶことは難しいだろう。

だから、この同盟にとって、アヤメは邪魔なのである。

冷静に考えれば、魔王を倒した今、

アヤメには、早く自分の元居た世界にお帰り願うのが一番なのだ。

もしも、冒険の旅の間であれば、

こんな考えは、ワームス自身、笑い飛ばしたであろう。

アヤメもトルーもテラも、大事な仲間なのだ。

だが、冒険を終えた今、

ワームスには、その考えを笑い飛ばすことなどできない。

それにだ。

アヤメの話によると、アヤメの家は、この王国より長い歴史と伝統があり、

アヤメはその伝統を継がなければならないという。

それに花が関係するようだが、それが何なのか、ワームスにはわからない。

ただ、自分やトルー、テラ、ユイヤー、ソバルナと同じように、アヤメも帰らなければならない場所があり、やらなければならない役割があるらしい。

ワームスにわかるのはそれだけだ。

だからこそ、教えて、元の世界に帰る道が開かれたことを教えたら、危険を冒しても、アヤメは帰らざるを得ないだろう。

アヤメが好むと好まざると。

冒険が終わり、皆が元の場所で与えられた役割を担うことを選んだように、

アヤメも元の世界で与えられた役割を担うことを選ぶだろう。

それが、自分たちなのだから。

ソバルナとテラが別れを選んだように。

でも、もし、元の世界に帰る道がなければ、

それは、それで、アヤメもトルーも幸せになるだろう。

2つの国が、婚姻という形で統合の道を選ばなくても、ゆるやかな同盟関係でも、両国を守ることできるだろう。

そして、ソバルナとテラというふたりもいつか結ばれる日がくるかもしれない。

ワームスは、

聖なる泉の門が開かれたことを

アヤメに伝えることが、自分の取るべき道なのか

それが、親友としてどうなのか、盟友としてどうなのか、臣下としてどうなのか、

将来この国を担うべき者としてどうなのか、

自分が本当はどうしたいのか、

自分自身でも答えが出せずにいたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231n/>

冒険のあと

2010年10月12日20時18分発行